

三島由紀夫「天人五衰」論

——二人の観察者——

中 尾 莉 奈

一 はじめに

三島由紀夫による長編小説『豊饒の海』は、文芸雑誌「新潮」に連載された。その期間は、一九六五年（昭和四〇年）九月号から、一九七一年（昭和四六年）一月号までの約五年半である。本稿で取り上げる「天人五衰」の執筆期間は、一九七〇年（昭和四五年）五月から同年十一月である。

三島由紀夫の生涯を閉じる作品となった『天人五衰』（「新潮」一九七〇・七・七一・二）は、これまでもっぱらその「遺作」としての位置によつて論の対象となつてきた感が強い。とりわけ『豊饒の海』四部作を通して視点人物として存在しつづける本多が、第一巻の主人公松枝清顕の恋人であつた綾倉聡子と再会しながら、清顕との関係を否定する彼女の言葉に茫然とさせられる最後の場面に重点が置かれて論じられがちであつた。^{（注）}

柴田勝二氏の指摘の通り、「天人五衰」を論じる多くは、門跡の最後の言葉について論じている。本稿では、そこに至るまでの本多と、新たな観察者透について考察していきたい。

二 「天人五衰」の本多

まずは、本多について考察する。本多は七十六歳。妻の梨枝は死去、家政婦を雇って生活している。本多は「暁の寺」において、見るという行為を積極的に行っていたが、「天人五衰」では見る事に対して考えを変化させている。その変化は、本多が見た夢から読みとることが出来る。

又しても自分はいくちか見てゐる。公園の太いヒマラヤ杉の幹のかげから見えてゐるやうに。屈辱の公園。夜のクラクション。自分はいくちか見てゐる。もつとも神聖なもの、もつとも汚穢なもの、同じやうに。見ることがすべてを同じにしてしまふ。同じことだ。……はじめからをわりまで同じことだ。（「天人五衰」第四章）

「暁の寺」において、見る事に「情熱」を燃やしていた本多が、「見ることがすべてを同じにしてしまふ」と考えるようになってゐる。見ることに特別な意味を見出せなくなったということは、見ることが生業である観察者として、致命的な欠陥だ。この欠陥を抱えた「天人五衰」の本多の前に、また転生者が現れる。

本多と少年の目が会つた。そのとき本多は少年の裡に、自分と全く同じ機構の歯車が、同じ冷やかな微動を以て、正確無比に同じ速度で廻つてゐるのを直感した。どんな小さな部品にいたるまで本多と相似形で、雲一つない虚空へ向つて放たれたやうな、その機構の完全な目的の欠如まで同じであつた。顔も年齢もこれほどちがふのに、硬度も透明度も寸分たがはず、この少年の内的な精密さは、本多が人々に壊されるのを怖れてもつとも深

部に蔵ひ込んであるものの精密さと瓜二つだった。（「天人五衰」第十章）

安永透は、今までの転生者とは明らかに異質な青年である。それは、本多と透が内面的に「瓜二つ」である点だ。本多と「瓜二つ」ということは、転生者という行為者の代名詞のような肩書きを付与されながら、内面は観察者と「瓜二つ」ということである。これは、観察者として致命的な欠陥が生じている本多の前に、本多とは違う観察者が現れたとも言える。更に言えば、本多は今までの転生者については、出会い頭に相手を転生者と認識していたにも関わらず、透については「贗物」ではないかと最後まで疑い続けている。「理智」「理性」をも超越して転生者をそれと信じていた本多が、透のことだけは疑った。勿論、ジン・ジャンの命日が曖昧なこともあり、透の左の脇腹にある三つの黒子以外の証拠が不十分であるからとも考えられる。しかし、黒子は無くとも幼少期のジン・ジャンを黥の転生者と見た本多であれば、多少の証拠不十分など問題にしないだろう。では、何故そこまでして透を転生者の「贗物」と疑うのか。また、疑いながらも養子として透を受け入れるのか。本多の矛盾した行動の原因と理由を説明していきたい。

先にも述べたが、本多は、自身と透が内面的に「瓜二つ」であるとしている。そして、そんな透を「純粋な悪」（「天人五衰」第十章）と語り、その理由を「少年の内面は能うかぎり本多に似てゐたからである」としている。では、その似ている点とは何か。何が「悪」なのか。

その生涯を通じて、自意識こそは本多の悪だった。この自意識は決して愛することを知らず、自ら手を下さずに大ぜいの人を殺し、すばらしい悼辞を書くことで他人の死をたのしみ、世界を滅亡へみちびきながら、自分だ

けは生き延びようとしてきた。しかしその間、窓から洩れる一縷の光を浴びたこともある。それは印度だつた。彼が悪を自覚し、悪からつかのまでも遁れ出ようとして際会した印度だつた。自分があれほどでも否定してきた世界を、道徳的要請によつて是非とも存在せしめなければならぬと教へるところの、決して自分がまだ到達する術もないあの杳かな光明と薫香を包含する印度だつた。

しかし自分の邪悪な傾向は、こんな老年に及んでまで、たえず世界を虚無に移し変へること、人間を無へみちびくこと、全的破壊と終末へだけ向つてゐた。今や、それも果せず、自分一個の終末へ近づかうとしてゐるところで、もう一人、自分とそっくりな悪の芽を育ててゐる少年に会つたのだ。(「天人五衰」第十章)

本多と透の「自意識」こそ二人の類似性の核であり、「純粋な悪」そのものであつた。一旦はベナレスで見た光景によつて、つかの間この「悪」から逃れたものの、本多はなお「悪」に染まつたままである。この類似性から、本多は次のようにも述べている。

それは今日見た少年が、今までの三人とは明らかにちがふといふことである。あの少年の自意識の機械仕掛けが、硝子を通して見るやうにはつきりと見えた。それは清頭にも、勲にも、ジン・ジャンにも、本多が嘗て見なかつたものだ。あの少年の内面は本多の内面と瓜二つのやうに思はれる。さうだとすれば、ありえないことだが、あの少年は、知つてゐてなほかつ美しい、といふ異様な存在なのであらうか。が、さういふことはありえない。ありえないとすれば、年齢も黒子も紛ふ方ない証跡を示しながら、ひよつとすると、あの少年は、はじめて本多の前に現はれた精巧な贋物なのではあるまいか。(「天人五衰」第十二章)

転生者としての証拠と、本多との類似性を併せ持った透を、本多は「精巧な贗物」なのではないかと疑念を抱く。本多に「精巧な贗物」という疑念を抱かせるほど、観察者の資質を持つている透ではあるが、透には転生者としての資質も備わっていた。それが美しさである。

悪は時として、静かな植物的な姿をしてゐるものだ。結晶した悪は、白い錠剤のやうに美しい。この少年は美しかった。そのとき本多は、ともすると我人共に認めようとしてゐなかつた自分の自意識の美しさに、目ざめ、魅せられてゐたのかもしれない。……（「天人五衰」第十章）

本多は、透の美しさを見て、自身の「自意識」まで美しいと感じた。ところが、転生者の資質を持っている透に対して、本多の「精巧な贗物」という疑念は晴れなかつた。そして、本多は疑惑の透に、先の転生者とは違う道を歩ませようと教育を施していく。観察者として、決して転生者の生き方に干渉しなかつた本多が、透には干渉した。そして、本多は透を通して先の転生者たちの欠点を見出す。

—— 大人しい透に向かつて、かうして執拗に説き進めながら、いつしか本多は、目の前に清顕と勲と月光姫を置いて、返らぬ繰り言を並べてゐるやうな心地にもなつた。

彼らもさうすればよかつたのだ。自分の宿命をまつしぐらに完成しようなどとはせず、世間の人と足並を合わせ、飛翔の能力を人目から隠すだけの知恵に恵まれてゐればよかつたのだ。飛ぶ人間を世間はゆるすことができない。翼は危険な器官だつた。飛翔する前に自滅へ誘ふ。あの莫迦どもともうまく折合つておきさへすれば、翼

なんかには見て見ぬふりをして貰へるのだ。

(中略)

清顕も勲も月光姫も、一切この労をとらなかつた。それは人間どもの社会に対する侮蔑でもあり傲慢でもあつて、早晚罰せられなければならない。かれらは、苦悩に於てさへ特權的に振舞ひすぎたのだつた。(「天人五衰」第十七章)

本多は、觀察してきた先の転生者たちをこのように語つた。その結果、養子として透を迎え、教育を施すという行為に繋がつた。觀察者が觀察することを知り得た彼らの欠点を元に、本多は透だけは例外にしようと考えたのである。この行為こそ、本多の「悪」である「自意識」によるものではないか。ただ觀察してきた本多が、觀察対象である筈の転生者を作り変えるなどという考えそのものが、「自意識」によるところのものなのだ。本多の、自己について知っているという自負と、透はその自分に「瓜二つ」であるという確信から、透を教育するという考えが導き出されているのもその為である。

本多の透への教育は、次の様な教育方針のもとおこなわれていく。

……詩もなく、至福もなしに！ これがもつとも大切だ。生きることの秘訣はそこにしかないことを俺は知つてゐる。

時間を止めても輪廻が待つてゐる。それをも俺はすでに知つてゐる。

透には、俺と同様に、決してあんな空怖ろしい詩も至福もゆるしてはいけない。これがあの少年に対する俺の

教育方針だ（「天人五衰」第十六章）

これは、転生者透を凡庸な青年に作り変えるものである。先の転生者たちは、絶頂の瞬間に命を落としてきた。それは選ばれた人間のみに許された特権である。本多の教育とは、透に対して転生者の特権である絶頂の瞬間の死を阻止しようというものだ。そして、教育を進めるにつれ、透に変化が現れてくる。

どんな返事も、一度口のなかでしゃぶつて試してみる習慣がついてゐた。（「天人五衰」第十八章）

思ったことをそのまま口に出すのではなく、口に出すか否かを考えてから答えるという癖は、本多の教育の賜物である。信号所で本多と初めて会った時の透は、表情も声も感情と連動して率直なものであり、そこに相手からどう見られるかといった考えは見られなかった。ところが、本多の教育を受けた透は、他者との関係を鑑みて、返事を口に出す習慣を身につけている。また、家庭教師の古沢の政治的思想について密告する透の姿も、本多の教育によるものである。

透の心の動きは、本多の夢みてきた人間の姿に照らせば醜かつたが、本多が透に望んできた人間の姿に照らせばまことに当を得てゐた。要するに彼が透に望んできたのは醜さだといふことを、すんでのところで告白しさうな地点に本多はゐた。（「天人五衰」第十九章）

転生者は、美しくなくてはならない。透もそれを備えていたが、本多の教育によつて人間の醜さを身につけた。これこそ、本多の望んだ結果である。先の転生者たちが持つ美しさを、透から取り除くことが、この教育の目的であり、透から「翼」を奪うことになるのである。透が転生者として「絶頂」を迎えないようにと教育を施す本多のもとに、浜中家から透と娘を縁付けたいという話が舞い込んでくる。先の転生者たちには必ず懇意にする美しい女の姿があった。清顕には聡子。勲には楨子。ジン・ジャンには慶子。関わり方に違いはあるが、転生者の傍らには美しい女が居た。ところが、透の傍に居たのは絹江であった。彼女は「どこからどう眺め変へても醜い」としか云ひやうのない顔「(天人五衰」第三章)であり、先の転生者たちの傍らに居た女たちとは異なる存在である。先の転生者同様に透の傍らに美しい女を置くには、許婚の申し出は絶好の機会である。しかし、それは本多が透に施している教育とは反する行為である。何故なら、転生者として透が「絶頂」を迎えないようにするには、先の転生者の傍らに居たような美しい女の存在は不要だからである。しかし、本多はこの申し出を受けようとする。

そのとき本多を鋭く射たのは、二十歳の透の死に襲はれて、身を擦つて嘆くうら若い許婚の姿の幻だつた。彼はその娘が、美しい、薄命さうな、蒼ざめた娘であればよいと思つた。(「天人五衰」第二十一章)

不要なはずの美しい女が、透の死を嘆く様を本多は夢想するのである。この矛盾した考えを、本多自身も「透に施している教育とはずいぶん矛盾してゐた。」(「天人五衰」第二十一章)と認めている。しかし、本多が矛盾した状況を求めるのは初めてのことで無い。それは、「暁の寺」において、観察者でありながら行為する矛盾、ジン・ジャンに恋をしながらも、自身と断絶していることを望むという矛盾、といった形で現れている。そして、本多の中にあ

る矛盾を「天人五衰」では、次のように語っている。

本多が怖れてゐることは本多が望んでゐることであり、本多が望んでゐることは本多が怖れてゐることだつたのである。（「天人五衰」第二十一章）

本多が転生者と関わる際には、常に矛盾を孕んでいるのである。本多の望みは、求めていく過程で矛盾を生み、「理智」「理性」の人であつた本多らしからぬ行動へと突き動かす。そして、「暁の寺」や「天人五衰」では、望みそのものが矛盾している。

「春の雪」で見た「いつはりの情熱」や「奔馬」で宿した「奇妙な情熱」は、与えることで満たされ、本多のものととの理智的な考え方と矛盾は生じて、結果そのものに矛盾は生じていない。一方、「暁の寺」の「覗き見」のように自身が求めることで満たされる欲求は、先に挙げたように、望みそのものが矛盾を孕んでいる。「天人五衰」においても、「暁の寺」同様に、望みそのものが矛盾を孕んでいる。では、「暁の寺」において矛盾の根幹に見ることへの「情熱」があつたのに対し、「天人五衰」における「情熱」とは何か。栗栖真人氏は次のように述べている。

全巻の軸をなす「輪廻転生」自体を情熱の対象とした本多の、その情熱の衰微を描いている。^(注2)

栗栖氏が言うように「情熱」が衰微しているかはいささか疑問であるが、見ることへの「情熱」では無い何かが多に現れていると考えられる。ここで一つの仮定が浮かぶ。

理智の判断だけでは律し切れない執着にとらはれた。(「天人五衰」第二十一章)

「天人五衰」において本多に現れたのは、「執着」ではなからうか。今まで清顕やその転生者たちと出会うことで、種類の違う「情熱」を宿してきた本多であるが、「春の雪」「奔馬」で、与えることに燃やしていた「情熱」が、「暁の寺」では一変、求めることに「情熱」を燃やす。「春の雪」の「いつはりの情熱」が「奔馬」で「奇妙な情熱」として偽りのものから本物へと変化したように、「暁の寺」で見えることに燃やした「情熱」が、更に過剰なものになれば、「執着」へと変化するのではなからうか。では、本多は何に対して「執着」するのか。まず浮かぶのが、透への「執着」である。

ここで、「天人五衰」での本多と透の関係に類似している三島の作品について触れる。『禁色』である。本多が透に教育を施すのと同じように、『禁色』の檜俊輔は、自身の考え方などを美しい青年、南悠一に植え付けた。俊輔は、自身を裏切った女たちに復讐する為に、決して女を愛さない美しい青年悠一を利用して、復讐を進めていく。この俊輔の姿を田中美代子氏は次のように述べている。

檜俊輔は、美貌と回春を志して、身代わりの人形づくりに心血を注ぐ。作家とは、もともと存在しないものの美学に命を賭ける呪われた人である。^(注3)

本多の透への教育も、これと似たものではなからうか。そして、『禁色』では、この過程で、俊輔は操り人形のよう
に接していた悠一に対して別の感情を持つ。

『嫉妬ではなからうか』と彼は自問自答した。『この胸苦しさ、澳のやうにくすぶる感情は』

(中略)

それは嫉妬だった。羞恥と憤怒のためにこの死人の頬は紅潮した。(『禁色』第九章)

ただ利用していただけた悠一が他の男に見られることに「嫉妬」したのである。そして、次第に悠一が俊輔に従わなくなっていく、俊輔は、悠一を自身に縛り付ける為に最期は死を選ぶ。このように、本多と同様に自身の欲によって悠一を思い通りに教育してきた俊輔が、最期には悠一と自身を結び付ける為に死を選ぶまでになるのである。これは明らかに「執着」である。つまり、最初は優位な立場に居る教育者側が、いつしか教育していた相手に「執着」を覚え、立場が逆転してしまうということだ。これは、「天人五衰」の本多と透にも言えることである。最初は、透を教育する本多の方が優位だったはずが、「執着」を覚えたことで行動に矛盾が生じる。すると、そこからは透の立場が強まっていく。

透が成年に達して東大に入学してから、すべてが変つたのである。透は俄かに養父を邪慳に取扱ふやうになった。逆らふとすぐ手をあげた。本多は透に煖炉の火掻きで額を割られ、ころんで打つたといつはつて病院通ひをしてからといふもの、透の意を迎へることもはや汲々としてゐた。(『天人五衰』第二十六章)

完全に透が優位になった状態においても、本多は透から離れることはなかった。どれほど虐げられようとも本多は全てを耐えた。それは、透が転生者であると信じるが故であった。

透が満二十一歳になるまでの半年の間に死んでくれば、すべてを恕してやることができる。それを知らずに今尊大ぶつてゐる若者の酷薄には、それを知っているとゐふことだけで、本多も辛うじて耐へることができる。(「天人五衰」第二十六章)

これは、『禁色』の俊輔とは大きく異なるところである。悠一に「執着」していた俊輔は、その思いの丈を、自身の死によつて表した。ところが、本多は「執着」している透の死を望むのである。再三述べてきたが、本多の望みは矛盾を孕んでいる。透が転生者として死ぬことの無いように教育を施しておきながら、転生者として死ぬことを夢想することで、自身を慰めているのである。これは、透に対しての「執着」ではなく、転生者という存在に「執着」しているからではなからうか。転生者の例外にすべく教育し、望んだように先の転生者には無かつた人間の醜さを見せる透が、先の転生者たち同様に死ぬ。その矛盾を完成させるには、それらを超越する何かが必要である。それが「運命」である。

松枝清顕は、思ひもかけなかつた恋の感情につかまれ、飯沼勲は使命に、ジン・ジャンは肉につかまれてゐました。あなたは一体何につかまれてゐたの？ 自分は人とはちがふといふ、何の根拠もない認識だけにでせう？ 外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻すものが運命だとすれば、清顕さんも勲さんも、ジン・ジャンも運命を持つてゐたわ。(「天人五衰」第二十七章)

人の及ばぬ先から強引に人を動かすものが「運命」であり、それに選ばれるのが清顕や転生者たちだ。このような

目に見えない他の誰も認識していないことを自分は知っているということに、本多は喜びを感じている。そこに本多の望みに矛盾が生じる原因がある。

ここで、本多の望みに矛盾が生じている「暁の寺」の例について考えていく。「暁の寺」で本多は、ジン・ジャンが転生者であって欲しいと願いながら恋をし、恋をしながらも自身とジン・ジャンは断絶した存在であって欲しいという複雑かつ矛盾した望みを抱えていた。しかし、そんな矛盾した望みを断ち切るようにジン・ジャンに死が訪れる。本多の矛盾を孕んだ望みなど超越し、ジン・ジャンは消えた。その結果を迎える前に転生者の証拠である黒子をジン・ジャンの脇腹に見ることができたことで、ジン・ジャンを見るという「情熱」は冷まされたのである。

清顕や勲の救出に失敗し、誰かを救うことに燃やす「情熱」は冷まされた。また、自身不在の中でジン・ジャンを「視見」することに成功したことで、ジン・ジャンを見る「情熱」は冷まされた。本多の「情熱」は悉く冷まされ、失われていった。それとは反対に、本多が観察してきた清顕や転生者たちは、最後まで突き動かされるままに人生を走り抜けていく。何者もそれを止めることが出来ない。そんな彼らに対し、唯一干渉するのが「運命」である。彼らは「運命」にむりやり引きずり廻されることで、「絶頂」の時にその生涯を閉じる。そのことを唯一知り得ることが出来ることに本多は「執着」しているのだ。

「運命」という目には見えないものと対峙することに、本多は「情熱」を注ぎ続けた。その「情熱」が、転生者を迎える度に濃度が増していき、「執着」へと姿を変えたのではなからうか。「天人五衰」において、本多は透に対して「精巧な贗物」ではないかと疑念を抱きつつも転生者と認め養子に迎えた。これは、本多が転生者の可能性があるのであれば、自身の手中に収めたいと考えるほどに「執着」していたからではなからうか。

本多が、強い「執着」から手にした転生者は、死を迎えることは無かった。透は、「運命」には選ばれていなかった

たのである。

あなたを外からつかんだものは何？それは私たちだつたのよ（「天人五衰」第二十七章）

慶子が指摘する通り、透を選んだのは本多と慶子だ。本多は「運命」と対峙することに「執着」するあまりに、「運命」より先に選び取ってしまったのである。更に、本多の矛盾する望みの為に透を教育したことで、透は「精巧な贋物」になってしまった。

「精巧な贋物」をつくりあげてしまった本多は、「天人五衰」の最後に月修寺へ聡子（門跡）に会うべく奈良へ向かう。

『自分は今日もう決して、人の肉の裏に骸骨を見るやうなことはすまい。それはただ観念の想である。あるがままを見、あるがままを心に刻まう。これが自分のこの世で最後のたのしみでもあり、つとめでもある。今日で心ゆくばかり見ることもおしまひだから、ただ見よう。目に映るものはすべて虚心に見よう』（「天人五衰」第二十九章）

月修寺に向かう前に、本多はこのように心を決めている。「運命」という見えないものを見ることを辞め、ありのままを素直に受け止めることを決めた。そんな本多に門跡は、次の様に答える。

何やら本多さんが、あるやうに思うてあらしやつて、実ははじめから、どこにもをられなんだ、といふことはありませんか？お話をかうして伺つてゐますとな、どうもそのやうに思はれてなりません（「天人五衰」第三十章）

ここで注目したいのは、観察者本多繁邦を否定しているという点である。聡子（門跡）の言葉は、『豊饒の海』全編を通して本多が見聞きしてきたもの、歩んできた道全てを否定している。「運命」に魅せられて「情熱」を燃やし、いつしかそれに「執着」するようになった本多を否定しているのである。だからこそ、本多は「記憶もなければ何もないところへ、自分は来てしまつた」（「天人五衰」第三十章）と感じた。この否定によつて、清顕が「運命」に選ばれていたのか、そもそも、転生者たちは本当に転生者だったのか。それら全てが曖昧になる。つまり、「外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻す」という「運命」を人が認識するという行為の否定。それが、「あるがままを心に刻もう」と誓つた本多が認識できた唯一のことである。

三 観察者・透

続いて、透について考察していきたい。『豊饒の海』における観察者とは、紛れもなく本多である。その観察対象は、松枝清顕から始まる転生者たちだ。一方、本多が観察してきた転生者たちは、周りには目もくれず行為者としてその人生を終えていった。ところが、新たな転生者候補が登場する。

「天人五衰」の最初の章で、読者は安永透という新しい個性の出現を告げられる。海を見張る信号所に勤める

孤独な青年。――「暁の寺」までの三巻で、物語はすべて、「春の雪」にしつらえられた人間関係の因果・展開として、精妙な綾目を織りなしてきた。しかし、透は、その複雑に入り組んだ人間模様のどこにも、その出自をも^(注)たない。

この三好行雄氏の指摘のとおり、透は異質な存在である。それは、透が行為者たちの転生者でありながら、見る側の人物であることから言える。信号員として海を見つめる透は、今までの転生者とは違い、変化し続ける海を見る側として存在していた。本多が、透に自身と似た部分があると感じたのも、この見るという行為からである。「春の雪」「奔馬」「暁の寺」では、本多のみが観察者であった。しかし、「天人五衰」では、透という新たな観察者が登場し、本多もまた観察対象となった。また、清頭が来世の夢を見たり、勲が夢でジン・ジャンに生まれ変わるであろうことを予見していたり、ジン・ジャンが前世の記憶を持っていたりといった、次の転生を予見する姿が全く見られない。転生者による転生の予見は示されず、輪廻転生の流れは透が二十歳を過ぎても生き残ることで終止符が打たれた。その理由を透の特異性に求めるのは自然な流れである。

このように、先の転生者たちとは違う特徴を持っている透ではあるが、左の脇腹にある三つの黒子だけは現れていた。これを根拠に、本多は透を養子に迎える。ただし、今までのようにただ観察するだけではなく、本多は透を教育する。

透のように、転生者が観察者としても存在することは、これまで観察者として存在した本多に影響を与えているのは明らかだ。それは、語りの部分に現れている。観察者による観察者の観察が「天人五衰」では起こり、本多が初めて観察者の目で観察されることになった。この変化は、物語の終結に大きく関わるのではないだろうか。そこで、以

降からは観察者透について整理してく。

本多の養子になる前、安永透は通信士として帝国信号に勤めていた。その時点で、透は観察者としての資質を覗かせている。それは、「眺めることの幸福は知つてゐた」（「天人五衰」第三章）と言っていることからわかる。では、安永透は「見る」という行為をどのように認識していたのだろうか。

見ることは存在を乗り越え、鳥のやうに、見ることが翼になつて、誰も見たことのない領域へまで透を連れてゆく筈だ。そこでは、美でさへも、引きずり朽され使ひ古された裳裾のやうに、ぼろぼろになつてしまふ筈だ。永久に船の出現しない海、決して存在に犯されぬ海といふものがある筈だ。見て見て見抜く明晰さの極限に、何も現れないことの確実な領域、そこは又確実に濃藍で、物象も認識もともどもに、酢酸にされた酸化鉛のやうに溶解して、もはや見ることが認識の足枷を脱して、それ自体で透明になる領域がきつとある筈だ。（「天人五衰」第三章）

このように、「見る」ことを突き詰めていくと、全ての足枷から解放されると考えていた。そして、「見る以上の自己放棄はなかつた」（「天人五衰」第三章）とも語っている。これは、「暁の寺」で本多が「視見」に自身の不在を求めたのと酷似している。また、「美でさへも、引きずり朽され使ひ古された裳裾のやうに、ぼろぼろになつてしまふ筈だ」という考えは、本多の「もつとも神聖なものも、もつとも汚穢なものも、同じやうに。見ることがすべてを同じにしてしまふ。」（「天人五衰」第四章）という考えと酷似している。両者とも、「見る」ことの先があることを確信している。さらに、本多透となつた後、透は「見る」ことの先にあるものについて語っている。

想像力と論理が僕の武器になり、それが自然や本能や経験よりもずっと精度が高く、蓋然性についての知識と調整に秀で、とにかく、水も洩らさぬほどに完璧だつた。僕は人間の専門家になつた、たとへば昆虫学者が南米の甲虫の専門家になるやうに。……人間が或る種の花の匂ひにうつとりし、或る情緒に包まれる経過を、僕は匂ひのない花で実験してみても会得した。

見るとはさういふことだつた。あの信号所から、直入船を海上に見出したとき、僕は、船が或る距離において、かくもこちらを注視し、望郷の念ひにかられ、十二・五ノットの速度に苛立ちながら、陸にかけたあらゆる夢想を極点にまでふくらますのを見た。しかしそこには実は僕の目の試用ていようしなくて、目は水平線のはるか彼方、目のものはや届かぬ領域にあらはれる不可視のものへ向けられてゐた。不可視なものを「見る」とはどういふことか？ それこそ目の最終的な願望、見ることによるあらゆる否定の果ての目の自己否定なのだつた。（「天人五衰」第二十四章）

「不可視のものを「見る」こと、「見る」ことによるあらゆる否定の果ての目の自己否定」が、透の持つ「見る」ことの先にあるものだ。不可視なものを見るには、可視のものを見てきた目では役に立たない。観察者が研ぎ澄ましてきた武器である目を捨てることこそ、「目の最終的な願望」だといふのである。

では、先に挙げたような「目の自己否定」という考えに至るまでに、観察者透は何を観察していたのだろうか。続いて、透の観察対象について挙げていく。

最もわかりやすい観察対象は、海である。物語の冒頭から、透は海を眺め、観察していた。そして、海を眺める事を生業にしながら、海に触れない生活を送っていた。次に、絹江である。他人と積極的に関わることの無かった透が、

唯一親交があるのが絹江である。その様子は事細かに語られ、彼女の狂女ぶりを表現している。続いて、本多である。透は、本多に見透かされていることを不快に思いつながら、本多の様子を観察している。本稿では、海や本多という観察対象と透の関係を考察することで、観察者透について説明していきたい。勿論、転生者として本多の前に現れている以上、転生者透についても考察する必要がある。そこで、転生者及び観察者としての透についても考えていく。

透の人物像を考える上で、先に挙げたように登場人物たちとの関係を考察する必要がある。そこで、登場人物たちについて透が言及している場面及び、登場人物たちが透について言及している場面を整理する。また、透の観察者としての側面の根底を支える「海」の捉え方についても同様に整理していくことで、転生者及び観察者としての透を考察する。

最初に、透と海の関係について述べる。透にとって海は、観察者としての目を磨く重要な観察対象である。信号所で海を観察し続けたからこそ、透は「眺めることの幸福は知つてゐた」のである。海との関係と銘打ったが、透が眺めていたのは海であり、船であり、港であった。そして、ただ眺めていただけでなく、他者について言及する時、海を眺めているかのように状況を語っている。

「君つて一寸、断然すごいわね。断然見込みがあるみたい」

と事後の女が言つた。

このはなむけの言葉の花束で、彼女は何艘の船を、港からあの大洋へと送り出したことだらう。（「天人五衰」第二十四章）

このように、相手の心情を港から船が出航する光景になぞらえて語っている。その視点は、信号所から眺めているかのような描写であり、透が観察者の立場から語っていることがわかる。しかし、この港に見立てて考える手法は、透のみのものでは無い。

彼は自分の死のあとにも、入港し、出帆し、日にかがやく国々へ航海する船を思つた。世界は彼なしでもまちがひなく希望に溢れてゐた。彼が港だつたら、いかに絶望した港であつても、幾多の希望の停泊をゆるさざるを得なかつただらう。しかし港ですらなかつた本多は、今や自分が徹底的に不要であることを、世界へ向つても海へ向つても、宣言してよかつたのである。

もし彼が港だつたら？

「本多港」にたつた二艘だけ停泊してゐる小さな船、荷役を一心に眺めてゐる透の姿をかたはらに見た。これは港と全く同じ船、港と共に朽ち、永久に出帆を拒否してゐる船だつた。少なくとも本多がそれを知つてゐた。小さな船は埠頭にコンクリートで接着されてゐた。理想的な父子だと本多は思つた。（「天人五衰」第二十五章）

ここでの彼とは、本多のことである。透同様、人の心情を港やそこに出入りする船になぞらえて語っている。ところが、本多は自身の死後についても語っている。人を港に見立てて語るといふ部分では透も本多も同じであるが、自身の死後について語る本多は、信号所から眺めるように語っている透とは立場が違ふ。この違いは何から来るのか。それは、透が今見えているものを観察しているのに対し、本多は見えないものを求めて観察しているからである。透が観察する場合は、自身がその場にいる必要がある、一方本多の場合は、自身とは隔絶した死後にまで言及している。

死後とは、即ち本多の不在である。自身の不在によって現前するものを観察したいと考えている為に、自身の不在について語っているのである。

透の観察者としての側面が露わになるにつれ、透の本多への憎悪は増していく。その憎悪は、本多が透を「根底から理解しようとし、又、理解する能力のある人間」(「天人五衰」第二十五章)であるが故に生じたものであった。「天人五衰」第二十五章の時点で、透は本多への殺意を自覚しているが、そのことすら見抜いている本多を前に、透は何事も起こすことが出来なかった。本多と透は、互いを観察しあつて過ごしていく。このように、観察者が観察されるという構図が「天人五衰」では随所に見て取れる。

しかし、大学入学と同時に、透は行為者としての力を存分に発揮するようになる。本多が逆らうと手をあげ、家の主導権を握ったのである。そして、観察者としての象徴であった海を見るという行為を「もう海を見なくてよい」と切り捨てた。観察者としての自己の否定をもつて、透は行為者という立場に落ち着いた。

一見、完全なる行為者へと変貌したように見えるが、先の転生者たちとは大きく異なる部分がある。それは、行為の根底にあるものである。清顕は「思いもかけなかった恋の感情」であり、勲は「使命」、ジン・ジャンは「肉」と、全て違うものに見えるが、その本質は同質のものだ。それらは、「外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻すもの」という特徴を持った「運命」だった。ところが、透の行為の根底にあるのは、「根拠もない認識」であり、端的に言えば「己惚れ」と言われるものである。透の行為は、自分が特別だという「根拠もない認識」が根底にあった。そして、透をつかんでむりやり引きずり廻したものは、本多と慶子であった。透には死へと導く「運命」が存在しない。二十歳で死ぬことを求められる転生者でありながら、死への道が存在しないのである。また、透は自身の死について次のように語っている。

人生すべてが義務である僕にも、美しく死ぬ義務だけはないわけだ。神から恵みを受けた覚えなどさらさらないから。〔天人五衰〕第二十四章)

絶頂時の「死」が求められる転生者たち。しかし、透にはそれが存在しない。死という「運命」の不在が、透を転生者の輪廻から弾き出したのである。

四 おわりに

ここまで、「天人五衰」の観察者たちについて考察してきた。本多は、「運命」という目には見えないものを見ることに「情熱」を注ぎ続けた。その結果、「天人五衰」では「情熱」は「執着」へと姿を変えた。一方の透も、見えないものを見ることは「目の最終的な願望」として掲げている。しかし、作中で透は自分の見える範囲について観察し続けている。今後は、透と絹江の関係など、透についてさらに考えを深めていきたいと考えている。

注

(注1) 柴田勝二「憑依の脱落―『天人五衰』の〈終り〉―」『國語と國文学』第七十七卷三号 至文堂 二〇〇〇年三月 四十四頁

(注2) 栗栖真人「情熱の終焉―『天人五衰』論―」『語文』第四十二輯 日本大学国文学会 一九七六年十一月 一六四頁

(注3) 田中美代子「夜もすがらの旅路」『決定版 三島由紀夫全集』第三卷(付属冊子) 新潮社 二〇〇一年二月 五頁

(注4) 三好行雄『豊饒の海』論―『天人五衰』を視座として―『国文学 解釈と教材の研究』第三十一卷八号 学燈社 一九

八六年七月 六頁